

主権者としてよりよい社会づくりへ参画する力を育てる社会科学習

～80年前の戦争から未来へ未来へ紡ぐ戦争の記憶～（小学6年）～

1 主題設定の理由

現代社会はグローバル化や情報化がよりいっそう進展し、AI技術のめざましい発展など、複雑で変化が激しく未来予測が困難な時代である。また、さまざまな価値観をもつ人との相互理解と、困難な課題に対して一人ひとりが主体的にかかわろうとする意識を高めていくことが不可欠である。これからの社会を生き抜く子どもたちには、社会の実態や変化を理解するだけでなく、習得した知識を活用し、見方・考え方を働かせながら課題解決にむけて自分自身で判断し、社会づくりに参画する力が求められている。

そこで研究題目を『主権者としてよりよい社会づくりへ参画する力を育てる社会科学習』とし、めざす子ども像を「社会的な見方・考え方を働かせて自らの考えを深め、社会にすすんでかかわろうとする子」と設定した。

2 本研究でめざす子ども像

社会的な見方・考え方を働かせて自らの考えを深め、社会にすすんでかかわろうとする子

3 めざす子ども像に迫るために必要な能力

- 必要な情報を手に入れ、情報を整理・分析して意見形成に生かす力 (情報活用力)
- 情報や他者の考えを踏まえ、自分の考えを深化させる力 (自己教育力)
- たがいの立場や意見を尊重し、対話を通して納得解を見出す力 (合意形成力)

4 能力を育むための手だて

(1) 切実感のある課題の設定

当事者意識をもって課題に取り組めるように切実感のある課題を設定する。そうすることで、自ら課題解決にむけての意欲を高め、主体的な学びの促進をすることができると考える。

(2) 見方・考え方を働かせるための工夫

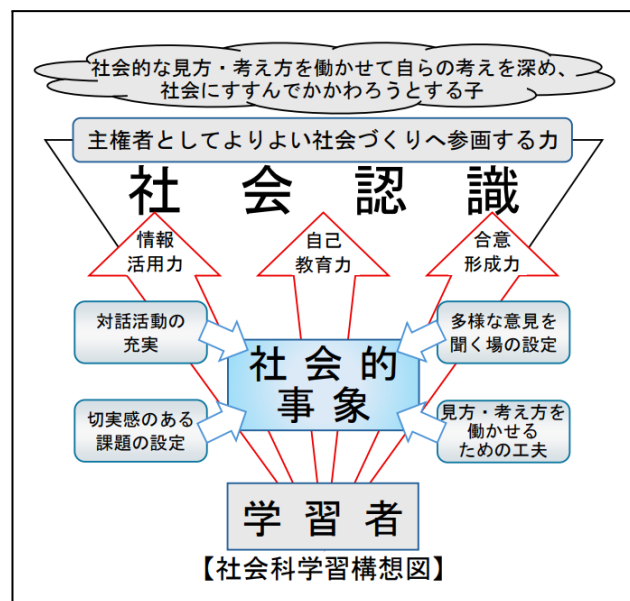
主権者として社会参画する力を育むためには、多面的・多角的に社会事象をとらえ、考えることが重要である。他者と協力して資料を読み取ったりゲストティーチャーの話を聞いたりすることで、当事者の思いを踏まえ、さまざまな見方・考え方を働かせることができるようになり、情報活用力や自己教育力が育まれると考える。

(3) 対話活動の充実

整理・分析した情報をもとに、自分の主張やその根拠となる資料を示しながら対話することで、新たな気付きや視点を得られる。この対話を立場や考えの違う他者と繰り返し行い、何度も自分の考えを練り直すことで、情報活用力や合意形成力が育まれると考える。

(4) 多様な意見を聞く場の設定

子どもが直面する課題に対して、一方向的な見方や知識、表面的な情報だけで判断させるのではなく異なる立場や背景をもつ多様な人々の想いにふれさせる場を設定する。地域の当事者や専門家、仲間との対話を通して、それぞれの意見の背景にある願いや想いの相違、多様な価値観を理解させる。このような場を意図的に設定することで、一方向的な見解に頼ることなく、多面的・多角的に事象をとらえ直し根拠に基づいた「納得解」につながっていき、社会参画に必要な合意形成力が育まれると考える。



5 授業実践例

(1) **単元名** 80年前の戦争から未来へー未来へ紡ぐ戦争の記憶ー (小学6年)

(2) 単元の目標

ア 戦争時の日本や世界の様子について多面的・多角的にとらえ、社会全体が戦争を継続するための体制になっていったことを理解できる。

イ 80年前の戦争がどのようなものだったか、また、戦争を繰り返さないために何が大切かを考え、自分なりの意見を表現できる。

ウ 一連の追究を通して、平和な未来を自ら築こうとする主権者意識をもつことができる。

(3) 単元の指導計画

ア 単元設定の理由

本単元では、当時の戦争を被害の側面のみならず、日本の加害や当時の国民も協力していた加担という3つの視点でとらえ、その背景や経緯を追究させることをねらいとしている。まず、地域の被爆者の話や全国の戦災についての学習から戦争の全体像をとらえる。さらに自分たちが住む鳥居松の調査を行うことで、かつてこの地域でも戦災があった事実と直面させ、切実感をもたせたい。この切実感を足がかりとして、開戦の理由や鳥居松が模擬原爆の標的となった背景、当時の社会情勢を調べていく中で、被害・加害・加担の視点を往還させ、国家の政策と国民の生活が複雑に絡み合っていた戦争のしくみを理解させたい。また、単元の終末では、小学生による平和への誓いの発信や被爆者の方による体験の語り継ぎなどが、今日まで続けられている理由について考え、戦争を繰り返さないために各立場の人がどのような願いをもって行動しているかに気付かせる。これらの学びを通して、戦争を繰り返さないために自分たちができることを考え、平和でよりよい社会の創り手として、主体的に社会にかかわろうとする意識を高めていきたい。

イ 児童の実態

本学級の児童は社会科への学習意欲が高い。これまでの歴史学習では、資料から当時の社会の様子や人々の願いを熱心に読み解くなどすすんで取り組む姿が見られた。また、現在の国際情勢や紛争問題の報道、これから学習する太平洋戦争へ関心が高く、戦争に対して「悲惨」「怖い」というイメージや平和を願う思いをもっている。関心はあるが、まだドラマやニュースを見るような遠い世界の出来事として見ており、自らの生活と関連づけてとらえるまでには至っていない。

(4) 授業展開 (10時間完了)

時	児童の学習活動
1	80年前の戦争でどのようなことが起きたのかを調べよう ○80年前の広島で起きた被害の様子を調べ、整理する。 学習課題①80年前の戦争はどのような戦争だったのだろうか
2	地域の被爆者の方に話を聞いてみよう ○ゲストティーチャー（地域の被爆者の方）から話を聞いたり、質問したりする。
3	全国の被害の様子を調べよう ○大都市の空襲や沖縄戦について調べ、全国的な被害の広がりについて整理する。
4	当時の鳥居松の様子について調べよう ○当時の地図や学校沿革史などから、身近な地域と戦争とのかかわりについて調べる。
5	戦争が起きた理由を調べよう ○太平洋戦争へと至る経緯や背景を調べ、当時と現代の感覚とのずれについて話し合う。
6	当時の日本の社会の様子を調べよう ○当時の日本社会の様子を調べ、戦争の継続とのつながりについて考える。
7	これまでの学習を振り返り、学習課題①についてまとめよう ○思考ツールを活用し、学習課題①に対する自分の考えをまとめる。
8	戦争を繰り返さないために大切なことを考えよう ○戦争の歴史を語り継ぐ人々の思いや活動にふれ、平和な社会のあり方について考える。 ○これまでに学習したことや人々の思いをもとに、平和な社会の実現のために自分ができること

	とや伝えたいことを整理する。 学習課題②戦争を繰り返さないために大切なことは何だろうか
9 10	学習課題②について、自分たちの考えを発表しよう ○単元の学びをもとに平和への願いを発表する。 ○全体を振り返り、平和な社会の実現のために自らができることをまとめる。

(5) 授業実践の記録および資料

〈第1時〉80年前の戦争でどのようなことが起きたのかを調べよう

80年前の戦争への関心を高めるために「原子爆弾」「被爆者」といったキーワードを伏せた2025年の広島・平和祈念式典で読まれた「平和への誓い」を提示した。「同じ過ちを繰り返さない」「一瞬にして当たり前が日常が消えた」といった内容に対して、児童から「80年前に広島で一体何があったのか」という疑問の声があがった。そこで、年表や被爆者へのインタビュー映像をもとに、広島・長崎への原爆投下を含む大きな戦争があったことを確かめた。原爆の被害について調べていくと「これほどひどいことがなぜ起きたのか」「当時の日本はどのような状況だったのか」という戦争の背景に疑問をもつ児童が多かったため、学習課題①「80年前の戦争はどのような戦争だったのだろうか」を設定した。映像に映っている被爆者の方が本校のある鳥居松町に住んでいることを伝えると「直接話を聞いてみたい」という声があがったので、ゲストティーチャーとして招き、話を聞くことにした。

〈第2時〉地域の被爆者の方に話を聞いてみよう

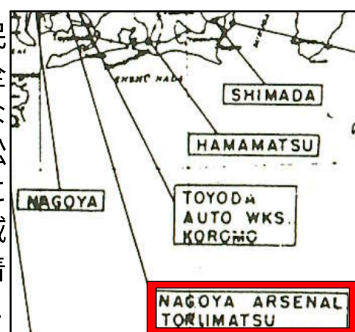
被爆者の方を招き、当時の生活や被爆体験について話を聞いた（資料1）。5歳の夏に被爆し、崩壊した家屋から救出された経験や今なお残る傷跡、そして痛み以上に一瞬で瓦礫の山となった町から火の手が迫る恐怖しさに泣き叫んだという語りに、児童は強い衝撃を受けた。被爆者の方の話を整理していく中で「食料も薬もなく、カーテンを包帯代わりにするしかなかった」という過酷な状態であったことを知り、当たり前の日常が一瞬にして奪われる恐怖しさを学んだ。その後、日本の戦没者数に着目した児童から「被害は広島・長崎だけではないのではないか」という発言があり、多くの児童が共感したため、次時で全国の被害について調べることにした。



【資料1 被爆者の方のお話の様子】

〈第3時〉全国の被害の様子を調べよう

全国の空襲や沖縄戦について調べた。児童は軍需施設だけでなく一般市民の暮らす都市も攻撃の標的になったことを知った。広島や長崎だけでなく全国で同じように被害があったことに気づき「こんなにたくさんの方が亡くなっているなんて知らなかった」と大きな衝撃を受けた。授業の最後に鳥居松の名が含まれている地図を提示すると（資料2）、児童からは驚きとともに「なぜ鳥居松を狙う必要があったのか」「標的にするだけの理由がこの地域にあったのではないのか」といった、攻撃側の意図や当時の鳥居松の役割に着目する声があがった。そこで、次時に当時の鳥居松の様子について調べることにした。



【資料2 鳥居松の名が記された地図】

〈第4時〉当時の鳥居松の様子について調べよう

当時の鳥居松の様子が記された地図や鳥居松小学校沿革史などの資料をもとに、戦時中の鳥居松で何が起きていたのかを調べた。すると「鳥居松で銃や弾薬を造っていたんだ」「子どもも働かされていたんだ」「学校のすぐ近くに爆弾が落ちていたなんて怖い」といった驚きの声があがった。そして、小銃や弾薬を大量生産する巨大な鳥居松工場があったこと、当時の5年生以上の児童が兵器や食糧の増産に動員されていたこと、終戦前日に学校付近へ模擬原爆（パンプキン爆弾）が投下された事実などが明らかになった（資料3）。調べ学習を通して、児童たちは身近な鳥居松という地域が軍需都市として戦争を支えていたからこそ、標的にされたのだということに気付いた。これらの事実を学んだ児童から「そもそも、どうして日本は戦争を始めてし



【資料3 模擬原爆着弾写真】

まったんだろう」と、戦争の始まりそのものに対する疑問の声があがった。多くの児童が共感したため次時から開戦に至った背景について追究していくことにした。

〈第5時〉戦争が起きた理由を調べよう

満州事変や日中戦争の資料から戦争が始まった背景を調べた。その中で「資源などを求めて中国を攻撃している」「日本の都合で他の国の人たちを巻き込んでいるから、これは加害だ」など日本の被害の面だけでなく、加害の面を知り、戸惑う様子が見られた。その事実を知り「自分だったら絶対に反対するのに、当時の人はなぜ止めなかったのかな」という新たな疑問が生まれた。話し合ってみると「今みたいに自由に意見を言える世の中じゃなかったんじゃないか」「平和主義という考え方自体がなかったのかもしれない」といった、当時の社会の実態に迫る予想が出された。そこで、なぜ人々が戦争を止められなかったのか、その真相を確かめるために当時の日本の社会情勢を詳しく調べていくことにした。

〈第6時〉当時の日本の社会の様子を調べよう

「なぜ誰も戦争を止められなかったのか」という疑問を解決するため、当時の標語や戦時下の教科書、赤紙、米軍のビラなどの資料を読み取った（資料4）。国家総動員法によって食事や言論までもが厳しく制限されていた実態を知り「国のために命を捧げることが正義だなんて、今の自分たちからは信じられない」「小学生まで戦争の訓練をさせられていて、これでは反対の声をあげるなんて絶対に無理だ」と、社会全体が戦争に向かっていったことに強い衝撃を受けた。自分たちの地域に鳥居松工場があったことや5年生以上の児童が軍需工場で労働していたことを想起し「無理やり命令されていたとはいえ、鳥居松の人たちも武器を造って、結果的に戦争に協力してしまっていた」「小学生のような子どもも、戦争に協力して



【資料4 資料から情報収集する児童】

いた」というこれまでの学習と関連づけ、当時の社会情勢への理解を深めた。これらの発言をきっかけに、これまでの学習を振り返りながら議論を深めると「国民は無理やり戦争に参加させられた被害者であると同時に、生活や労働を通して戦争を継続させる側になってしまっていたのではないか」という考えに至った。国民が戦争を支えていた側面をこれまでの視点とは異なる「加担」とし、次時で学習課題①について「被害・加害・加担」の3つの視点から考えをまとめることにした。

〈第7時〉これまでの学習を振り返り、学習課題①についてまとめよう

ピラミッドチャート図を活用し、学習課題①に対する自分の考えをまとめた（資料5）。

国全体や国民の生活までもが組み込まれて継続された戦争で、被害者にも加害者にもなった戦争	鳥居松のような身近な場所も巻き込まれ、人々が正しく判断できないまま協力させられてしまった戦争。
結論（どのような戦争か）	結論（どのような戦争か）
日本は他国を武力で攻撃して大きな被害を与えた加害の国であると同時に、原爆や空襲で多くの命が奪われた被害の国でもある。そして国民自身も国のしくみや命令によって、知らず知らずのうちに戦争を後押しする加担へと巻き込まれていった。	鳥居松でも銃を作り、子どもも働くほど日本全体が戦争一色になっていた。反対の声をあげることもできなかった。「お国のため」という雰囲気にならないう中で、誰も戦争を止めることができなくなっていた。
理由（なぜそう考えたかという点）	理由（なぜそう考えたかという点）
・満州を切り離したり、武力で従わせたりして、数多くの人々にも罪を広げた。 ・広島・長崎は原爆を落とされ、春日井にはパンプキンという模擬原爆を落とされたりした。沖縄は空からも海からも攻められ、占領までされた。 ・国民は工場で銃を作るなど、戦争に加担していた。自ら進んでやるものもいれば、国にやらされるものもいた。	自分たちの学校の近くにあった鳥居松工場で銃や弾薬を作っていて、5年生以上の小学生も働かされていた。終戦前日の8月14日には、学校のすぐ近くに模擬原爆が落とされていた。国家総動員法で食事やニュースが制限され、ラジオや教科書でも「正しい戦争」と教えこまれていた。
歴史的事実（この戦争で実際にどのようなことが起きていたのか）	歴史的事実（この戦争で実際にどのようなことが起きていたのか）

【資料5 意見形成したピラミッドチャート図】

単元当初は、戦争を「空襲や原爆で多くの命が奪われた悲惨な出来事」という被害の視点でとらえていた児童が大半であった。しかし、前時までに獲得した被害・加害・加担の3つの視点をもとに追究や議論を重ねてきたことで、その認識に大きな変化が見られた。児童はピラミッドチャート図において80年前の戦争を「被害者にも加害者にもなった戦争」「正しく判断できないまま協力させられた戦争」など、3つの視点を結びつけて自分の言葉で表現していた。このように、被害・加害・加担の3つが相互に複雑に絡み合っていた事実気付いたことで、戦争の構造的な理解へとつながっていった。学習課題①を追究し、戦争の構造や全体像が見えてきたところで「国どうしの対立や問題を、戦争という手段で

解決しようとするということについてどう思うか」と投げかけた。すると児童からは平和への共通の思いとして「どのような理由があっても、命が奪われる解決策は間違っている」「80年前のような悲惨な歴史を二度と繰り返してはいけない」といった意見が出された。しかし、それを防ぐために自分たちができる具体的な行動まではイメージできなかった。そこで学習課題②「戦争を繰り返さないために大切なことは何だろうか」を設定し、次時からの追究へとつなげた。

〈第8時〉戦争を繰り返さないために大切なことを考えよう

前時の課題を考えるために、被爆者の方の「次の世代に平和な未来を託したい」「体験者が減り、この歴史が風化していくことが恐ろしい」という思いや、30年以上にわたって平和への願いを発信し続けている広島市の6年生の取り組みについて想起させた。すると、両者とも戦争を繰り返さないために自分にできる行動を起こしていることに気付いた。これらを踏まえ、学習課題②について話し合うと「周りの人に正しい歴史を知ってもらおう」「情報を鵜呑みにせず政治の動きに関心をもつ」「周りに流されずに正しいと思ったことを伝える」といった具体的な意見があがるようになった。さらに「自分たちが学んだことや考えたことをもっと多くの人々に伝えたい」という声があがった。このような意欲の高まりを受け、伝える対象を考えていく中で、被爆体験を聞かせていただいた被爆者の方や身近な保護者が候補としてあがり「『戦争を繰り返さないために大切なこと』発表会」を行うことにした。最後に、学習課題②に対する現段階の考えを記述した。

学習課題②に対する児童の考え

- ・鳥居松でも小学生が工場で武器を造らされていたように、普通の人でもいつの間にか戦争に協力してしまう恐ろしさを学んだ。だから、被害のことだけでなく、他国を傷つけた加害や子どもまで加担していた歴史を知ることが二度と戦争を起こさない社会づくりにつながると思う。
- ・自分たちの学校のすぐ近くに模擬原爆が落とされていたことや、被爆者の方のお話を聞いて、戦争の怖さを身近に感じた。この怖さを伝えていく人が減っていくからこそ、今の平和が多く犠牲の上に成り立っていることを忘れず、私たちが責任をもって多くの人に歴史を伝えていきたい。
- ・80年前は国家総動員法などと言いたいことも言えず、周りの空気に逆らえない社会になっていた。だからこそ、これからはニュースなどの情報をすぐに信じ込まないで自分で調べたり、周りに流されずに正しいと思った意見を言ったりして、自分で考えることを大切にしたい。

〈第9・10時〉学習課題②について、自分たちの考えを発表しよう

第9時では、第7時にピラミッドチャート図を活用して整理した被害・加害・加担の多面的・多角的な視点や自分たちの戦争観を改めて想起し、それをもとに聴き手に伝えるべき内容を検討した。自分たちの学校近くに模擬原爆が投下された事実や政府による情報の制限、社会の同調圧力といったこれまでの学びを振り返りながら、どの歴史的事実を根拠に自分たちの考えを主張すべきか話し合った。その過程で、領土問題や資源の奪い合いといった80年前の戦争と現在も続く戦争や紛争の背景にある共通点に気づき、関連づけて考える児童の姿も見られた。

第10時では、被爆者の方や保護者を招き「『戦争を繰り返さないために大切なこと』発表会」を行った（資料6）。単元を通して、戦争を「一方的な被害」ととらえる当初の認識から、日本の加害や市民・子どもまでが巻き込まれて協力させられた加担という側面、さらに自分たちの地域も軍需都市として戦争を支えていたという背景を含めた構造的な出来事としてとらえ直し、まとめた内容を発表することができていた。さらに、現代の世界情勢とも照らし合わせながら戦争を繰り返さないために大切なことを根拠とともに発表した。

発表後、参加した保護者からは「さまざまな視点から説明できていた。戦争には被害者と加害者がいることを多くの人に知ってほしい」「同じ出来事でも、いろいろなとらえ方があることに気付けたのが伝わった」「80年前の戦争から現在をとりまく世界情勢についても言及していて平和の大切さを考えさせられた」といった感想が寄せられた。多面的・多角的な歴史認識や現代への問題意識を含めた自分たちの発表が聞き手に届き、大人に平和について考えてもらおうきっかけになれたことに手ごたえや自信をもつ姿が見られた。最後に、振り返りを書き、単元全体のまとめとした。



【資料6 発表会の様子】

単元の振り返り

- ・春日井市での空襲やパンプキン爆弾投下の事実を知り、身近な場所で起きた悲惨な出来事に寒気がした。人の命が失われる被害の悲惨さを思い知った。被爆者の方が「戦争経験者が減り、この辛い歴史が忘れ去られてしまうことが怖い」と言っていた。だから、実際に話を聞いて学んだ私たちが戦争のリアルな恐ろしさを伝え、未来へバトンをつないでいく責任があると思った。
- ・発表会で、私たちが学んだことをもとに「戦争を繰り返さないために大切なこと」を伝えたとき保護者の方々が真剣に聞いて、受け止めてくれたことが嬉しかった。自分たちの思いがきちんと周りの人に届き、考えさせるきっかけになるんだということが自信になった。
- ・最初、日本は大きな被害を受けただけなのだと思っていた。しかし、被爆者の方のお話やさまざまな資料を通して、日本が他国を傷つけた加害のことや、民間人・子どもまでが戦争に加担させられていった事実を知った。このことを忘れずに受け止めることが、二度と戦争を繰り返さない未来につながると考えた。
- ・ネットやニュースの情報がすべて正しいとは限らないとわかったので、これからはすぐに信じないで、自分でもしっかり確かめる習慣をつけたい。大人になったら、選挙に行って自分の意見を政治に届けたり、地域のゴミ拾いや募金などのボランティア活動に参加したりしたいと思った。それに、大きなことだけじゃなくて、身近な人への親切や思いやりを大切にして、コツコツと平和な社会をつくるためにできることをしていきたい。

(6) 結果と考察

- ア 戦争の背景について学ぶ中で、日本の他国への加害という側面があることに気づき、身近な地域に軍需工場があったという事実からは国民の加担という側面に気付くことができた。さらに、思考ツールを活用して歴史的な事実を整理し「80年前の戦争がどのような戦争だったのか」についての自らの考えを深めたことで、戦争が一部の指導者の決断だけでなく、社会全体のしくみによって継続されていたという構造的な理解へと深めることができた。
- イ 課題への追究を通して整理した多面的・多角的な歴史認識を根拠とし、戦争を繰り返さないために大切なことについて意見を形成することができた。「加害や加担の歴史からも目を背けないことが未来につながる」「情報に惑わされず自分で確かめることが大切だ」というように、歴史的事実から現代を生きる自分たちができることについて考えを伝えることができた。そして発表会では、保護者や被爆者の方に対し、自らの考えや具体的な行動意欲を伝える姿が見られた。
- ウ 戦争時の日本や世界の様子だけでなく、実際に被爆者の方に出て話を聞いたり、自分たちが住む鳥居松の戦火の様子を調べたりすることで、当時の時代背景を意識し、戦争を生き抜いた人物に共感しながら学ぶことができた。また、それらを踏まえて戦争を繰り返さないために大切なことについて自らの意見を形成し、発表の場を設定したことで、単なる歴史の学習で終わらせず、平和な未来を自ら築こうとする主権者意識を醸成することができた。

(7) 今後の課題

今回の実践では、ピラミッドチャート図を活用して「被害・加害・加担」の多面的・多角的な視点で整理して深めた歴史認識をもとに自らの納得解を整理し、保護者や地域の被爆者へ発信することを通して、主権者として社会にかかわろうとする意識を高めることができた。一方で、本單元における対話活動は、自分の考えを整理して相手に伝える活動が中心であり、意見や立場の異なる他者と話し合いを重ねながら一つの解決策や共通の考えをまとめていく学習場面までは十分に位置づけることができなかった。研究主題である「よりよい社会づくりへ参画する力」をさらに高めるためには、今後は自分の考えを伝え合うだけでなく、たがいの意見の違いを尊重しながら対話を通してより多くの児童が納得できる考えをともに見出していく合意形成力を育む授業づくりに取り組んでいきたい。

6 研究のまとめ

わたしたちは、児童の追究意欲を高められる素材を教材化し、児童自身が対話を通して考えを深め、価値判断を行う実践に取り組んできた。今年次の成果は、鳥居松工廠を巡る歴史的事実や地域の被爆者の体験談を教材化し、対話を重ねたことで、児童が課題を自分事としてとらえるようになった点である。これまで遠い出来事としてとらえていた戦争について、被害の視点だけでなく加害や加担といった多面的・多角的な視点を往還させながら構造的にとらえ、歴史的事実を根拠としながら主権者として自らの納得解を形成し、他者へ発信・共有する学習を展開できた。これにより、社会的事象を多面的・多角的に考察し、よりよい社会づくりへ参画する力を育むことができた。